

---

# 奴は四角（よんかど）にいる

ハシルケンシロウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

奴は四角よんかどにいる

### 【Nコード】

N6660E

### 【作者名】

ハシルケンシロウ

### 【あらすじ】

日本競馬の名門ジーワン、天皇賞（秋）。昔からこのレースは「一番人氣が勝てない」と云われているが、昨年ついに、サイレンススズカ以来の事故死馬と、前代未聞の事故死者が出てしまった。その悲しみを引きずったまま、また今年も天皇賞がやって来る。

## 1 二年目、都築好弘（前書き）

この作品は、夏ホラー2008百物語編の内の一編です。検索欄で

夏ホラー2008

百物語編

のどちらかを入れてサーチしてくださいますと、百物語の全てにヒットいたします。なお、2008は半角限定となっています。ご注意ください。

では皆様、涼しい夏を……m（―）（―）m

## 1 二年目、都築好弘

都築好弘は相棒ジェットストリームに跨がり、若干憂鬱な気持ちになっていた。天候は雷雨。相棒にとって何よりも厳しいコンディションだった。

「まあいい。例え雨が降ろうが、不良だろうが、俺らが組めば間違いない最強だ」

好弘は自分に言い聞かせるかのように、相棒に軽く撫でながら語りかける。

もうすぐ、入場だ。

遙か前方から、この雷雨の轟音にも負けないほどの、大歓声が巻き起こった。このレースの二番人気、一枠一番ロンバルディアの本馬場入場だ。好弘の足が、否、それを乗せている本年度の牡馬クラシック三冠馬、ジェットストリームの脚が、この大歓声にゆつたりと、かつ、確実に近付いていき、やがて、吸い込まれていった。

九枠十七番サツキドロップスが、芝が雨露の重みにへたっている本馬場へと駆け出し、ジェットストリームがそれに続いた刹那、轟音がターフを揺るがした。

「ジェット、大地を揺るがす大声援つてのが……、ほんとに在るん

だな」

苦笑いを浮かべながら好弘はジェットストリームの返し馬を行った。

ジェットストリーム。先週の菊花賞で牡馬クラシック三冠を制覇した、漆黒の馬体に鼻先まで突き抜けるド派手な流星の青毛牡馬。三十年間破られることのなかった芝二千四百メートルの日本レコードを一秒半も縮めたその逃げ足は、ロンバルディアが一着でゴールしても単勝が万馬券になるほど、壮絶な人気を集めていた。そんな馬の本馬場入場である。声援によって地震が起こるのも、ジェットストリームがそれに驚いて暴れ出してしまうのも、もはや必然的な流れと言えるだろう。

「あと三戦だ」

いつものように暴れ始めた相棒を、いつものように宥めながら好弘は、想い人の笑顔を思い浮かべていた。門倉優里愛、このレースでロンバルディアに騎乗する、一歳年上の先輩ジョッキーである。《あと三戦……、この天皇賞、次のジャパンカップ、締めの有馬記念。それ全てに勝てたら……》

### 【プロポーズ】

それは、自分に対して立てた誓い。そして、年長者を扶養していくための力の源。この天皇賞、どうしても落とす訳にはいかない。返し馬を終え、ゲートに入る。この段階でもう、ジェットストリームは落ち着きを取り戻していた。必要以上に盛大なファンファールが鳴り響き、ゲートが開く。それと同時に勢いよく飛び出してきた黒い塊があった。

九棒十八番、ジェットストリームだった。

「なんだ!？」

絶好のロケットスタートで馬群からの突出に成功した直後、なにか得体の知れない不安と猛烈な寒気に襲われる。普通のサラブレッドと比べ蹄の大きいジェットストリームは、確かに馬場が荒れると脚が滑る。だが、そんなありきたりな戦術レベルの不安ではない。

なにかもつと、得体の知れないアンノウンに取り憑かれてしまったような、とてつもない不安。

スタート直後の小カーブを抜けたところで動悸や息切れ、悪寒といった不安から来る諸症状は脱したが、不安はまだ残っていた。突然このような症状に見舞われたという事実に対する不安が。天皇賞に於いて、この小カーブをもう通過せずに済むなら何の問題も無いのだが、東京競馬場芝二千メートルのレースは、このスタート地点をもう一度通過しなければならないのだ。

戦略上最も重要な地点となる、最終コーナーの出口として。

原因不明の不安に陥ってしまった好弘を背に、ジェットストリームは向正面から第三コーナーに入ろうとしていた。頭と尻尾を激しく振り乱し、何やらただならぬイレ込みようだ。もしかすると、背を預けている好弘の不安が伝わってしまったのかもしれない。ある

いは、獣としての本能が、好弘と同じ【何か】を認識してしまったのだろうか。

とにかく【かかっている】。

それだけは、素人目にもはっきり判る疾りだった。

これまでの展開は、九枰十八番ジェットストリームが後続を大差で引き離してのバカ逃げ一人旅状態となっている。明らかにかかっているものの、展開自体は今迄の勝ちパターンと同じだ。雷雨の中にあっても超満員の観衆も、おそらくはさほど気にしてもしないだろう。

第三コーナーを無事回り切って、いよいよ例の最終コーナーに差し掛かる。

位置取りは、最短距離でコーナーを回り切ることの出来る内ラチ沿い、いわゆるインベタを採択。周囲に一頭もライバル馬が居ないのだから、至極当然の選択だ。馬場が荒れている上での豪雨であるため、半ば泥沼と化してはいるが、蹄が大きいジェットストリームにとっては、濡れた芝の上を行くよりかえって安全でもある。コーナーの出口付近に何も無いことを確認した上で、内ラチに張り付いた。

順調だ。ここまでは何の問題も無い。後続がどの程度詰めてきたのか把握するため、好弘は一度振り返る。先程と比べるとかなり詰

まってきてはいるが、二番手ロンバルディアはまだ第三コーナーの真ん中。

《勝った！》

そう確信した瞬間、好弘の体が宙に浮いた。あまりに突然の出来事に、この落馬というアクシデントに対する対応が全く取れなかった。

《何があった！？》

宙に舞いながら必死に辺りを見回して状況を把握しようとした好弘は、有り得ない光景を目にしまう。最終コーナーの出口に、確認した時は間違いなく存在していなかった葦毛馬が、さも苦しうに悶えながら横たわっていたのである。

《何だあれ！？　ぐはっ！》

存在し得ないアンノウンに驚いた瞬間に着地。受け身を取り損ねての背中からの着地に、呼吸もままならない状況に陥ってしまった。当然、身動きなどとれる筈もない。

そんな好弘の上に迫ってくる黒い影があった。葦毛馬に蹴っ躓き、バランスを崩して倒れ込んできた相棒、ジェットストリームである。身動き一つとることの出来ない彼に出来ることはもう、おとなしく下敷きになることだけだった。

体重五百三十六キロ。そんな塊の下敷きになってしまえば、いかに鍛え抜かれていようが人体など一たまりも無く押し潰されてしまふ。

【ぶちっ】

かわいらしい音を発てた都築好弘の胸部と腹部は、弾けて芝に張り付いた。



天皇賞（秋）着順

一着、一枠一番、ロンバルディア

二着、三枠六番、アステロイドボム

三着、八枠十五番、サイレントボマー。

九枠十八番、ジェットストリーム、競争中止、予後不良。騎乗騎手  
都築好弘、圧死。

二年連続となった悲劇に、東京競馬場は大混乱に陥ってしまった。

## 2 四年目、月島幸子 天皇賞二日前

天皇賞（秋）。数有る日本のジーワンレースの中にあっても、格段に格式高いレースだ。だからこそ、現役最強クラスの馬達が大挙して登録して来るし、賞金額もべらぼうに高い。

十月最終週の日曜日、東京競馬場の第八レースとして開催されている。今年もこの、秋の風物詩である伝統の一戦が東京競馬場にやってくるようになっていた。一番人気に推された馬と人は「必ず死ぬ」、という恐怖のジンクスを引き連れて。

ここまで三年連続だ。馬は必ず骨折、予後不良。騎手も転落死と圧死の二種類あったが、必ず死んでいる。今年で四年目。開催を中止しようとの声もちらほら上がりはじめたが、まだまだ開催派を上回るほどの人数には満たなかった。

月島幸子は今年の一番人気に推されてしまいそうな、短距離王者のシルフィードウインドの主戦騎手を務めていた。

「ユリア、あんた来年一番人気取っちゃいそうだね」

今、喫茶店で共に茶をシバいている、同期の親友門倉優里愛に天皇賞の話題を振る。

「いや、来年より今年だよ！ あんたほぼ間違いなく一番人気じゃん！」

そう、今二人が問題にしなければならないのは、来年の優里愛のことではなく、今年の幸子のことなのである。今の所競馬新聞では、二重丸三つ、黒三角二つの本命に挙がっていた。唯一の救いは、競馬予想のカリスマが距離不安を理由に、黒三角を打っていることくらいだ。死の一番人気を回避できる可能性は、極めて薄い。

「ユッキ、降りなよ。長く騎手やってりゃ、そのうちまた良い馬乗れるって」

「嫌……。自分が助かるために他の人殺すなんて、絶対嫌。それに

さ、シルフと一緒に死んでもいいかなって思ったりしてるし」

デビュー戦から今まで足掛け五年、一度も背を譲ったことのない相棒だ。シルフィードウインドの歴史は、そのまま月島幸子の歴史と直結している。初勝利も初重賞制覇も、初ジーワン制覇も全てこの馬。シルフィードウインド在つての月島幸子なのである。

「シルフはいいコだから、出来れば助けてあげたいし」

確かに跨がってさえいれば、手綱操作によって転倒や骨折を回避できるかもしれない。

「こんな言い方しちゃ、ユリアにぶつ殺されちゃうかもしれないけどさ、ぶつちゃけた話今までののは、ただの脇見運転だと思うし」

そういえば去年までの事故は、逃げ馬を駆るジョッキーが、後方を確認すべく振り向いている時に発生している。例外無くこのパターンだ。

「だからあたし、後ろから行こうと思うの。シルフは短距離馬だから、どっちみちそうしなきゃバテちゃうだろうし」

今までと違う位置からの競馬。確かに、対策としてはそれで充分なのかもしれない。一番人気にかけられた呪いなのか、それともただの脇見騎乗による事故なのか。これによって、少なくともどちらなのかははっきりするだろう。

「来年は多分あんたのテヅカアクエリアスなんだから、最低でも参考になる騎乗はして見せるよ」

これは心強い。出来ることなら、出走自体を回避してもらいたいものだが、どうしても疾りたいと本人が言うのだから、せめて助かってもらいたい。それが自分の参考に出来るならそれほど嬉しいこととはない。

「もし仮に死んじゃったとしても、どんなこととしても、必ずヒントになるようなことは伝えてみせるし」

出来れば無事に帰って来てもらいたいのだが……。

「そういえば、ユリアん家の……、あの野球やってる靈感兄貴、あれ呼んでみてさ、それであんたの日曜の騎乗全部キャンセルして見

に來なよ、天皇賞」

靈感兄貴。それは、沖縄シユバルツというプロ野球団に所属する、門倉慶輔という優里愛の兄。金、土、日と有明サーペントスタジアムでの東京テンタクルス戦が組まれていた。そして、今日の試合での先発登板も決まっている。

つまり、彼を明後日である日曜日に、東京競馬場に呼び付けるための環境は整っているのである。

人の目に見えないものを見て、聞こえない声を聞ける者をもう一人スタンドに置くことによって、超常的な方面にもアプローチをかけようという提案だ。

勿論それは、幸子自身のためではなく、優里愛のために。

「とにかく色々やってみるよ。ダチのためにも、あたしのためにもね？」

幸子にはこやかに笑いながら片目を閉じると、伝票を持って席を立った。慌てて優里愛も席を立つ。

それにしても、幸子自身がもう既に死のジンクスを受けているのも同然の状況であるにも関わらず、この落ち着き様である。

《もしかすると、どうにかしてくれるかもしれない》

僅かばかりの期待を持ちながら、親友の背を追いかけて、優里愛は喫茶店を後にした。

### 3 四年目、月島幸子 三角まで

昨年、一昨年の大嵐とは打って変わって、今年の天皇賞は二年ぶりの快晴だ。

一番人気は大方の予想通り六枠十一番、シルフィードウインド。見た目としては何の特徴も無い、典型的なお馬さん色の真っ茶色な鹿毛牝馬だ。跨がる騎手も、乗り替わる事なくいつも通り月島幸子。陣営は、万全の状態でシルフィードウインドをターフへと送り出してきた。照り付ける日差しを反射して輝くほどに馬体がキラキラ。パカパカと小躍りしているかのように軽やかな脚取り。もはや絶好調であることに疑いの余地はない。

それに付随して、一番人気になってしまっただろうことも。

あからさまに絶好調なシルフィードウインドに、スタンドから送られるとても悲しげな視線が四つ。月島騎手の親友、門倉優里愛とその兄慶輔だ。

自分達が出せる額を全て二番人気の馬に注ぎ込んだが、それでもまだシルフィードウインドの一番人気は動かず。今でこそ単勝三倍であるものの、門倉兄妹が散財するまでは零・一倍という、旨味の全く無いオッズだったのである。

パドックでの周回を終え、一枠一番マキノクレイモアから順繰り場内へと移動していく。パドックからレースコースへと移動した馬達が次々とスタートゲート前に集結し、そして、ゲート内に収まっ

ていった。特に暴れているような馬も無くすんなりとゲートイン完了。

「ここまででなんかある？」

優里愛が兄に問う。

「期待せんほうがいい。月島さんだっけ、彼女まず助かんねえよ」

慶輔は長年同じ屋根のしたで生きて来た優里愛に対して、今迄見せたことのない、本気で何かに怯えているような顔を向ける。

「駄目だ、俺にやどうにも出来ん。多分……、誰にもどうにも出来ん」

陰陽師であつた父の血を最も強く受け継いでおり、門倉十兄弟の中で一番の除霊能力を持つこの慶輔が、優里愛を絶望の淵へ叩き込む。

九杵十八番、マキシマムスターがゲートに収まり、ファンファアレが鳴り響く。

そして、発走。

一番人気シルフィードウインドとそれに跨がる月島幸子騎手が、黄泉への旅路を疾りはじめた。

時間にして二分プラスマイナス二秒の世界。だいたいどこの競馬場でも、芝二千メートルの勝ちタイムはこの範疇に収まるのだが、この短時間に様々なドラマが展開される訳である。

一番人気シルフィードウインドは、事前に優里愛に告げていた通

り、最後方にいた。この馬にとって二千メートルは、バテるかバテないかのギリギリの距離であるため、体力をひたすら温存してゴール前で一気にブッコ抜く【追い込み策】を採るのは当然といえば当然かもしれない。

慶輔の視線はレースそっちのけで四角に釘付けとなっていた。三年間立て続けに死亡事故が発生した現場に。そこに超常的な何かが存在していることは、ほぼ間違い無いだろう。

「慶輔くん？ 一体何が見えるのさ」

独特の節回しで優里愛が尋る。

「レギオンだ……。今までに斃れた人や馬の無念さや怒りが一緒にたに凝り固まった、最凶クラスの集合霊が四角に取り憑いてやがる」手摺りにつかまる手が腕ごと震えている。いつも平然と地縛霊の横を通過していく慶輔が、プルプルと震えているのだ。優里愛はその慶輔の様子から、四角に居るのが並の悪霊ではないのだということ、まざまざと感じ取ってしまった。

スタート直後、レースの四角となる小カーブを過ぎたところで、幸子が少し震えたことを優里愛は見逃さなかった。

「今ユツキ、ちょっと震えたけど、トイレでも行きたくなったのかな」

もはや質問にも値しない戯れ事を口にする。

「あ？ 別に排泄欲求はねえだろうよ。普通のやつでも震えが来るぐらいのレギオンが、あそこに居るってことだ」

そう受け答えた慶輔が、さらに言葉を続ける。

「おまえも来年、嫌つつう程震えるだろうよ。あの白いのに跨がってこのレースに疾るならな」

そして、こう締め括った。

「さっきも言っただけど、俺にやどうにもできん。今俺が優里愛ちゃんにしてやれることは、死にたくねえならこのレースに出るなっ

提案と、ダチが死ぬのを見たくねえなら、もう帰るぞって催促だけだ」

レースは二角を曲がって向正面まで進んでいる。相変わらずシルフィードウインドは、最後方をチンタラと追走していた。あれなら追い出しのタイミングさえ誤らなければ、ほぼ負けない。勿論、無事に四角を通過できればの話なのだが。

馬群が地響きを発てて、二人の前に向かって来る。慶輔の震えが、先頭馬が四角に近付くにつれ次第に激しさを増してくる。それに釣られるように、隣に居る優里愛もまた震え始めていた。

「正直もう、ここに居たくねえ。人が死ぬのも、ダチが死ぬのを見たらおまえのツラも、どっちも見たくねえんだ」

「大丈夫。ユツキなりに対策は打ってあるみたいだし、それがうまくいくかどうか見届けるのは、来年呪いを受けそうなあたしの参考になる」

優里愛は震えながらも、その提案を受け入れなかった。受け入れることなど出来る筈もない。幸子は優里愛のために、色々と対策を立てているのだから。勿論それは幸子本人のためでもあるのだが。

「駄目だったら駄目で、別な手を打てばいいんだから」



レースは三角に向かっている。いよいよ四角突入への秒読みに入った。シルフィードウィンドは少し位置を上げているものの、まだ中団やや後ろ。ここからさらに上がる【まくり戦術】なのか、四角を抜けるまでひたすら後ろに居る【直線一気】なのか。ここでの動き方によって危険度はかなり違ってくる。

言うまでもなく、四角を抜けるまでは後ろに居れば居るほど安全だ。

「半端に上がってきたけど、どうする気なんだろ？」

正直、狙いが読めない。まくるにしろ、まくらないにしろ、とにかく位置が半端過ぎる。

「振り向かなきゃいいんだって腹なら、普通は後ろのままだろうな」

三角に入って、シルフィードウィンドは慶輔の予想とは逆の動きに出た。まるで何かに吸い寄せられるかのように、スルスルと前に上がっていく。そして、三番手にいる状況で四角に入ってしまった。

#### 4 四年目、月島幸子 四角

一番人気の呪いを受けているだろうシルフィードウィンドと、それに跨がる月島幸子は、何を血迷ったのか四角に入る時点でまくり戦術によって三番手につけてしまっていた。

前に居れば居るほど後ろを気にしなければならないのだということとは言うまでもない。必然的にそれだけ振り返る可能性も高まってくるのだ。

「府中でまくつても意味無いってこと判らんわけでもないだろうに……、何だってあんなこと」

東京競馬場は一風変わった競馬場で、ホームストレートが五百二十メートルもある。競走馬がレースでスパートをかけ始める平均距離が三百メートル前後であることを踏まえると、最後方にポツンと取り残されでもしない限り、三角からまくる必然性など皆無なのである。

なのにそれを、命が関わるレースであるということを解っている筈の、幸子がやってしまったのだ。

「おまえのダチ、わざと負ける気でのいるのか……？」

慶輔が妙に説得力のある見解を示してきた。確かに、距離がギリギリの馬で東京競馬場の三角からまくったりしては、ゴール前でバテるのも当然である。もし幸子が【勝つことも許されない】と踏んでいるならば、この騎乗も領ける。

一昨日『参考になる騎乗をして見せる』と言っていた幸子だ。あらゆる可能性を網羅するつもりなのかもしれない。

だが、この【わざと負ける】という騎乗を、優里愛は参考にすることは出来ないのだ。

なぜなら、現在二歳最強であるとされているテヅカアクエリアスが、かつてキングカメハメハが目指したNHKマイルカップ、東京優駿（日本ダービー）、天皇賞（秋）の変則三冠【東京競馬場三冠】

を、優里愛を主戦騎手として取りに行く方針を陣営が固めてしまっているからなのである。

勿論断れば済む話なのだが、いつぞや幸子が語っていた通りの「自分が助かるために、人を犠牲にするなんて嫌」という倫理感、「ガメ（テヅカアクエリアス）と死ねるなら本望」という連帯感が、その一番有効な対策に待ったをかけてしまう。

先頭集団が四角を抜けてきた。シルフィードウインドは、まくりの勢いをもって先頭に踊り出ている。いわゆる【四角先頭】という、先行馬の必勝パターンだ。

これがスプリント戦やマイル戦だったなら、そして、東京競馬場や新潟競馬場外回り以外のコースであったなら、この時点でシルフィードウインドの勝ちほぼ確定したようなものなのだが、残念ながらこのレースは東京競馬場芝二千メートルなのである。慶輔の指摘通り、負ける可能性のほうが遥かに高い。

最後の、ホームストレート五百二十メートル。まるで何かから逃れようとしているかのように、幸子が必死に手綱をしごいている。「うわ、ひっでえな。レギオンが分裂して寄ってたかってジヨッキーに張り付いてるぞ」

どうやら幸子は早くそれから解き放たれようとしているらしい。頭部から透明な液体を宙に舞わせながら、ブルブルと震え始めてしまった。

「うわっ、ユツキ泣いちゃった……」

「この状況で泣くだけで済むなんて、たいした根性だよ」

幸子の体の震えは、痙攣しているかのように激しくなってくる。

「そろそろやつちまうか……」

「何を？」

「……失禁……」

決して有り得ない状況ではない。それでも、残り三百メートル地点に到達するまで、その惨状を持ち堪えている。

「マジ凄えよ、お前のダチ。お前なんかたぶん、4つて標識の辺り

で垂れちまってんじゃねえのか？」

幸子がどれほど恐ろしい目に遭っているのかは、彼女の様子を見れば一目瞭然だ。確かに並の人間であれば、とくに振り向いているだろう。少なくとも、失禁ぐらいはしている筈だ。優里愛はそれを、心から認めた。

「おい、ユキコちゃんどつかおかしくなったんじゃねえのか!？」

観客のこの叫びを皮切りに、スタンドが一斉に幸子の体調を心配しはじめる。明らかに普通ではないのだ。この反応も、少し遅すぎるぐらいだろう。震えがやたらと大きくなり、もう、痙攣しているようにしか思えなくなってきた。突然発病した食中毒が何か、おそらく観衆の認識はそんなところだろう。

そんな幸子に背を預けたシルフィードウインドは、相変わらず先頭をキープしたまま、二百メートルの標識を通過した。千二百メートルや千六百メートルといった短距離ジーンレースを十勝している実力馬の、東京競馬場三角からの大まくりである。この段階でシルフィードウインドは、二番手の馬に十馬身差、いわゆる、大差を付けていた。

このタイミングで幸子から、何かからせき立てられたように、否、狂ったように、鞭が連打で入れられる。シルフィードウインドはその激に応えるように……、減速した。そう、既にバテバテだったのである。いくら距離にして二百メートル近い差をつけているとはいえ、ギャロップしている馬の移動速度を踏まえると、とてもセーフティーとは言えない。

今、漸く馬群がスタンド左端に陣取る門倉兄妹の前を通過していった。案の定、シルフィードウインドとの差を見る見る詰めてしまっている。だが、そんなことはどうだっていい。問題は、勝ち負けよりも安否なのである。

乗っている人のほうがかなり酷い目に遭っているようだが、取り敢えずは人馬共に健康だ。あと百五十メートル。いくら速歩ぐらい

の速度まで落ちているといっても走っているサラブレッドであれば、ものの一秒程度で走破できる距離であろう。【あと一秒】この一秒を乗り越えることが出来れば、おそらく幸子は救われるのである。

残り百メートル。後続の馬群が三馬身差程度まで追い上げて来ている。もはやシルフィードウインドが差し切られてしまっただろうことは、その場に居る誰の目にも明らかだった。だが、それでよいのかもしれない。一番人氣が負ける。それによって、呪いの連鎖が一時的にはあるが断ち切られる事になるのだから。

ここ最近の一番人氣は、結果を出せないどころの話ではなく、完走すらできていない。これは偏に呪いを受けてしまったが故の悲劇であるのだが、負けてゴール板を駆け抜けることによって、連鎖を断ち切り、そして、単勝オッズ零・一倍の馬で負けるという生き恥を晒すことによって、死ぬという効果の無効化或は相殺が望めるかもしれないのだ。

「優里愛ちゃんのダチ、意外とビンゴかもしれないぞ」

先頭を疾る鹿毛馬を食い入るように見詰めながら、慶輔が呟いた。「少なくとも、【振り向かなきゃ死なん】っていう彼女の読みは正解じゃねえかな。じゃなきゃ、分裂までして張り付く必要ねえし」

《確かにそうかもしれない》

優里愛は思う。集合霊が単体に分裂して一斉に取り憑く、その動機は仲間に引き込むこと以外に無いだろう。その状況でまだ幸子は生きている。それは、幸子を仲間に引き込むための条件が未だ満たされていないということなのである。

今まで幸子が見せてくれた騎乗は全て死ぬ条件に当て嵌まらない。後ろから行く、三角からまくる、四角を抜けたとき、先頭に立っている。少なくとも、この三つの条件ならば死なずに済むことが判明したのである。これは大きな収穫と言えよう。来年の十月には優里愛がこの呪いを受けてこのレースを疾っているのだから。

残り五十メートル。二番手の馬とシルフィードウインドの尻が重なった。もう、シルフィードウインドの勝ち完璧に無い。東京競

馬場のゴール板は、門倉兄妹からの距離が遠いため、二人は双眼鏡をバッグから取り出した。そして、それを覗き込んだ時、二人は見ってしまったのである。

一番見たくなかったもの。

一番見てはならないもの。

顔に空いている全ての穴から様々な体液を垂れ流しながら、引き攣り切った笑顔を浮かべている【月島幸子の顔】。

そう、幸子は、ゴールまで後数メートルというところまで来て【振り向いてしまったのだ】。

「ちっ！」

「嫌ああああ！」

慶輔が舌を打ち、優里愛が泣き叫ぶ。

ゴール直前、シルフィードウインドが前のめりに浮き上がる。前脚は地面に噛み付いたまま。間違い無くへし折れるだろう。或はもう、折れているのかもしれない。

幸子は、まだ馬上で持ち堪えている。普通なら、とつくに吹っ飛んで行ってしまうだろう状態であるにも拘わらず、鎧に足を掛け、手綱を握っている。まだ【騎乗している】と見なされる状態を馬体が垂直に立ち上がった今もしっかりとキープしていた。

その両脇を馬群が遠巻きに通過して行く。馬の川が逆立ちしているシルフィードウインドを中心に真っ二つに分かれ、さながら『十戒』のワンシーンのようだ。

殿馬（ビリケツの馬）が脇を通過すると同時に、逆立ちしていたシルフィードウインドが、背中から倒れた。その背に跨がっていた幸子は当然下敷きとなる。馬の大津波が去った後には、月島幸子を源流とする、赤い河が残ってしまった。

事故を起こした人馬を係員が慌ただしく収容していく。掲示板には、審議中を意味する【審】と、写真判定中を意味する【写】が代わる代わる点滅していた。おそらくはシルフィードウインドがゴールしているのか否か、していたとして、それを認めるのか否かが議題であろう。

傍目で見える限り、鼻先は通過していたのだ。だが、鼻先が掠め通っただけで、全身は通過していなかったのである。

掲示板に、直ぐさま確定を意味する【確】が現れた。三番目の枠に【11】。それは、シルフィードウインドの三着入着が正式に認められたことを意味している。

#### 天皇賞（秋）

- 一着 三番テツカソレイユ
- 二着 一番マキノクレイモア
- 三着 十一番シルフィードウインド

なお、シルフィードウインド、骨折予後不良。騎乗騎手月島幸子、

下腹部破裂の重態。



## 5 五年目、門倉優里愛 三角まで

東京優駿を勝った後、アーリントンミリオン（米国アーリントン競馬場芝二千メートル、ジーワン）九着、オールカマー（中山競馬場芝二千二百メートル、ジーター）十三着でテヅカアクエリアスは天皇賞に臨んでいる。

二つのレースをわざと着外負けすることによって、一番人気を避ける手段を採ったのだが、どうやら傍目に見てもわざとであることが見え見えであつたらしく、開催当日、単勝一倍の一番人気となつてしまつていた。

テヅカアクエリアス。それは、焦げ茶色の黒鹿毛馬、真つ黒な青毛馬という両親から生まれてきた白い馬。ごく稀に真つ白く生まれてくる葦毛馬がいるが、葦毛は片親が葦毛馬でないと絶対に生まれてこない最劣性遺伝子であるため、この馬は正真正銘の突然変異体である【白毛馬】ということになる。

五十年ぐらいに一度出るか出ないかという希少種白毛。そんな馬が無敗で東京競馬場二冠を達成してしまつたのだから、否が応にも競馬サークルは盛り上がってしまったのだ。

もし、東京優駿に負けていたならば今日の一番人気は無かつただろう。なまじこの二千四百メートルを制覇してダービー馬になつてしまつたからこそ、【二千メートルが限界だとみせかける】という目眩ましが通じなかつたのである。

この馬の主戦騎手である門倉優里愛は、ここに来るまでにあらゆる防御策を打っている。兄である慶輔からお札を作ってもらつたり、義姉である霊能者に東京競馬場をお祓いしてもらつたり、その義姉と二人で霊能番組に出ている妹からお守りを作ってもらつたり、その中に好弘の遺骨を入れてみたり。

レース前、テヅカアクエリアスを連れ立って、初めてではない東京競馬場で異例のスクーリング（基本的には、初出走となる競馬場

の勝手を馬に覚えてもらうための場内引き回し）も行っている。もちろん今回は、二回疾つてどちらも勝っているテヅカアケエリアスのためではなく、騎手である優里愛が生き延びるためのものだった。レギオンに対する出走前のご挨拶。そして、事故後に遺品として遺族から手渡された婚約指輪のお供え。これは、好弘の分とセットで四角の脇に置いてある。もちろん生きて帰ることが出来れば、回収してそのまま指に嵌めるつもりだ。優里愛の好弘に対する想いは、決してその場凌ぎの見せ掛けではないのだ。

防御は完璧だ。あとは、レギオンの攻撃力がそれを上回らないことを祈るのみである。

十月最終週、日曜日。この日は秋雨前線の消滅前の最後の抵抗なのか、霧のように煙るしとしとした雨がサラサラと降っていた。一昨年、一昨今年の、悲劇を見越して天空で神が泣いているかの如き大粒の雨ではなかったが、それでも馬にとっては足を滑らせやすいコンディションであることに変わりはない。

《晴れてほしかったなあ。不安要素は一つでも減ってほしいのに》  
パドックをテヅカアケエリアスと共に引き回されながら、優里愛は心中頭を抱えた。運命の発走まであと少し。今、優里愛が震えたのは、決して秋から冬に季節が移ろう時期特有の肌寒さだけが原因ではない。

いよいよ本場場入場。返し馬を終え、ゲート前に待機する。何やらただならぬ気配。ゲートの向こうに見える小カーブから漂う気配。どうやら、あのコーナーに何かが居ることは、ほぼ間違いなさそうだ。

全馬ゲート前に出揃い、間もなくゲートインである。ゲートが開いて、続々と各馬がゲートに収まっていく。

ここで場内にざわめき。一番人気テヅカアケリアスがバタバタと激しく暴れてゲートインを嫌がっているのだ。キャリア九レース、今の今までこんなことは一度も無い。

必死に手綱を引いて、ようやくこのことで相棒を落ち着かせた優里愛は、すぐ正面にどんよりと漂うドス黒い雰囲気には震えながら、テヅカアケリアスと共にゲートへと収まっていった。

いよいよファンファーレだ。いつ聞いても場違いな程盛大で、しかも時折音程がズレる。いつもと変わらない天皇賞。一昨年、事故を起こしたジェットストリームの脇を素通りして、一着でゴールした天皇賞。あの時は全く感じなかった何かを、今はしっかりと感じ取ってしまったている。あの時好弘を黄泉へと送った死神の気配を、今年は優里愛がひしひしと感じ取っているのだ。

ファンファーレが終了し、スタート前の一瞬、場内がまるで異次元空間であるかのように静まり返る。数あるジューンレースの中でも特に格式の高いジャパンカップ、東京優駿、そしてこの天皇賞にしか見られない、そこに存在する全てのものが満場一致で息を呑む瞬間である。

いつもの彼女なら、ほぼ間違いなくこの時点で手綱をしょいでいることだろう。テヅカアケエリアスは先行馬。先行馬のスタートは、遅らせてから加速して先団に取り付くよりも、飛び出してから減速する方が馬に対する負担を抑えることが出来るのだ。

だが、今日は。東京競馬場三冠の最終レース、この天皇賞（秋）だけは、このタイミングで手綱をしょくわけにはいかなかった。

【後ろから行けばいい】

昨年のレースで、親友月島幸子が身を呈して示してくれた、呪い対策の一つである。意識意識不明の重態に陥ってまで示してくれた助かる騎乗の見本だ。活用しない手はない。

【追い込む】

レース前から優里愛は決めていた。したがって、今回は意識的にスタートを遅らせる腹積もりなのである。

沈黙の瞬間から狂喜の瞬間へ。ゲートが開き、各馬がスタートする。その瞬間に騰がる歓声がまた、万馬券でも出たかのような狂おしい騒ぎ様なのである。疾る度に優里愛は思う。

「何がそんなに嬉しいんだろ？」

こんなことを言っているぐらいなのだから、彼女にもまだまだ余裕があるのかもしれない。

スタート直後のイカレ気味な歓声のあとに続いた声は、どよめき

だった。テヅカアケエリアス、出遅れ。もちろんこれは、跨がつている優里愛が意識的にスタートを遅らせた故だが、今回はこれに、他馬が軒並み好スタートを切っていたという偶然が重なり、ぱっと見た印象ではテヅカアケエリアスが大幅に出遅れたのと同じような状況が出来上がってしまったのである。

ロケットスタートの申し子、超光速の逃亡者と呼ばれて久しいライトニングボルトが、馬群の中で必死に出ムチを入れて抜け出しを図っているという状況が、テヅカアケエリアス以外の全ての馬が申し子レベルのロケットスタートを切ったのだという何よりの証拠となるだろう。少なくとも優里愛は、スタート直後にライトニングボルトが馬群の中に居るのを初めて見る。

この状況はさすがに誤算であつたが、優里愛は敢えて、加速せずにそのまま馬なりで追走することに決めた。テヅカアケエリアス以外が軒並みロケットスタート。しかも、一番人気はくたばると踏んだのか、テヅカアケエリアスは全くのノーマークで、二番人気のライトニングボルトを単騎で逃がすまいと必死になって競りかけている。そして、ライトニングボルトが単騎で逃げようと更に加速する。典型的な「超ハイペース」の展開だ。後方に陣取る者など、テヅカアケエリアスしかない。それほど近年の競馬において、このレースの一番人気は勝てないし、超光速の逃亡者を単騎で逃がすこともまた、それ以外の馬にとっては絶望的な展開なのである。

目まぐるしくハナを切る馬が入れ代わるという激しい先頭争いを茅の外から見る形で、優里愛は魔のカーブへと差し掛かる。

「うっ!？」

思わず呻き声が出てしまった。時は十月末。確かに【うすら寒い】という表現がしつくり来る季節ではある。そういう季節ではあるのだが、日常的な季節の変化によるそれとは別な、表皮ではなく、臓腑の感覚神経が感じ取っているような病的な寒気がコーナー通過の瞬間に襲い掛かってきたのである。

まず腕が震え始めた。それを皮切りに、震えはまるで何かの病気であるかのように、全身に広がっていく。己自身の危機察知能力が必死に告げている。【降りろ、もう降りろ】と。

いつぞや慶輔が言っていたレギオンとやらは、結局視認出来なかった。気配はしっかりと感じ取っているだけに余計に恐ろしく感じてしまう。おそらく、その姿が見えた時こそが死ぬ時なのだろう。

テヅカアクエリアスは、現在最初の小カーブを通過してスタンド前のストレートの中腹に差し掛かっていた。先程まで激しい先頭争いを繰り広げていた他馬達は「とにかくライトニングボルトの抜け出しを許すな」というのが満場一致の戦略らしく、徹底マークというより、むしろ、進路妨害紛いの包囲網を展開している。彼らは既に一角を通過して、二角の入口、つまり、カーブの真ん中に差し掛かっている。

どうやら、テヅカアクエリアス以外の馬がゴテゴテに密集した超ハイペースという方向に、レースのベクトルは固まったようだ。

とにかく流れが早い。千メートル通過タイムが三九秒。正しく前代未聞の珍事である。こんなスピードをゴールまで持続できる馬がいたとしたら、それはもうサブレッドではないか、或は何かによって増強されているか、とにかくドーピングで引っ掛かることはほぼ確定的である。

この展開で、ミドルペースないしちょっと速いぐらいのペースであればテヅカアクエリアスの負けは決定的なのだが、それが超ハイペースとなると話は逆になる。他馬がゴール前でバテることは目に見えており、今の段階で、テヅカアクエリアスの勝ちは確定していた。

勿論、無事走り抜ければの話なのだが。



## 6 五年目、門倉優里愛 四角

信じ難いことに、この超ハイペースを持続したままレースはホームストレートへと突入していた。当然のことながら、この段階でバテて脱落してしまった馬というのもボチボチと出始めている。現在のテツカアクエリアスの位置は、脱落馬を何頭か追い抜いて、十番手辺りに着けている状態で、三角出口に差し掛かっている。

さすがにそろそろ加速していかないと、勝ち目が全く無くなってしまうため、優里愛は手綱をしごいてテツカアクエリアスに加速を促した。

徐々に速度を落とし始めた先頭集団に、一番人気テツカアクエリアスが弾丸の如きスピードで襲い掛かる。普通に考えれば単純にテツカアクエリアスが上がってきただけなのだが、先頭集団がバテているために、上がるスピードが凄まじく速く見えるのだ。

そして、いよいよ四角に突入する。まず入口に入った刹那、それは聞こえてきた。

『助けてくれ……』

《！？ 何！？》

聞き覚えのある声。否、聞き馴染んだ声。その主はいつも、優里愛に心地良い安らぎを提供してくれていた。都築好弘。今も健在ならば、間違いなく優里愛の夫となっている男性だ。

勿論助けてやりたい。優里愛の好弘を助けたいという気持ちは、誰よりも強い筈だ。だが、具体的にどう助けてほしいのか、いまひとつはつきりしていなかった。助けるためにするべきことが何も浮かんで来ないのだ。

《解んないよ、何しろっての？》

結果、優里愛は聞き返すことしか出来なかった。

『あの世に逝きたいんだ。おまえが四角を抜けたあと、振り向いて



くれさえすれば……』

好弘の言葉を、最後まで聞くことは出来なかった。振り向かなければ助かる、それはつまり、振り向いてしまったら死ぬのだということの意味しているのである。目をきつく閉ざし、烈しく左右に頭を振り乱しながら、

「嫌あー！」

と喚き散らすことしか優里愛には出来なかった。

最愛の男に死ねと言われる悲しみ、おそらくそれは、想像を絶するものだろう。その悲しみに堪え切れず落涙しながら目を閉ざした瞬間、優里愛を乗せたテヅカアクエリアスは、四角を抜け、ホームストレートに突入した。

風の当たり方が左半身中心から、前半身体へと切り替わった。そのことで優里愛はテヅカアクエリアスがストレートに入ったのだと直感する。恐る恐る目を開けてみると、何かが覗き込んでいた。一番最初に一連の事故の被害に遭った達川騎手が、口から舌のように腸管をはみ出させながら、とても恨めしそうな目付きを優里愛へと向けているのだ。

「ひっ、ひいつ、ひいいえああああー！！」

頭の中から、全ての思考が消し飛んだ。そして、思わずそれから目を逸らそうとする。勿論それを完全に視界から外すためには、後ろに振り向かなければならない。それは、反射的な行動であり、自分の意志など、一切関知しない領域の動きである。

それをやってしまいそうになった時、助け舟を出してくれた者がいた。

『目え閉じなさい！』

昨年の被害者、月島幸子だ。まだ亡くなってはいないはずである。少なくとも、今日の第一レース発走の時点ではまだ息が在ったのだ。親友の声を聞いて、我に返った優里愛はそのアDBアイス通りに目を閉ざす。

「ありがと、ユッキ」

『言ったでしょ、どんな手使ってでも有効な手段が判れば伝えてみせるって』

確かに言っていたが、まさか幽体離脱で直接乗り込んでくるとは。『これからあたしが手綱操作の指示してあげるから、言う通りに動かしなさい』

要するに、このままずっと目を閉じているということなのだろう。幸子の指示が始まる。

『大外に振るわよ。手綱を右に』

『違うな』

もう一つの声が、幸子の指示に割って入った。好弘だ。

『奴ら、猛烈なスピードでコーナーに入ったから、インがから空きになってる。行くなら左だ』

二体の霊の間で指示が真つ二つに分かれている。一体どちらの指示に従うべきなのか、その判断は非常に難しい。

『騙されちゃだめ！ さつき判ったでしょ、好弘君はもう、あんたを道連れにしようとする悪霊でしかないのよ！』

『いくら月島のふりしたって無駄だ。月島はまだ死んでねえ、その事実が有る限り、月島がここに居る訳ねえんだよ』

どちらの言うことも、筋が通っている。一概にどちらが嘘を言っているのか判断するのは難しい状況だ。目を開ければ済むことなのだろうが、おそらくはそれが許されない状況がまだ続いているだろう。

『俺を信じる』

『さつき殺そうとした相手を信じるつもりなの！？』

この一言で、優里愛の気持ちは、幸子の方へと傾きかけた。そうなのだ。ついさつき、好弘は確かに【振り向け】と囁きかけてきたのである。

幸子を信じて、手綱を右に動かそうとした刹那、その声は降りてきた。耳からではなく、身につけたお守りを介して直接心に響いてきた好弘の声が、

『あそこで俺が振り向けと言ったから、見ないで済んだら？ 四角で待ち構える俺達<sup>レキオン</sup>の姿を』  
と事情を説明している。

《！》

確かに、あのタイミングだったからこそ四角を曲がり切る少し前、つまり、奴らが居るだろう場所に行く直前に目を閉じることが出来たのだ。それより何より、彼自身の遺骨を介して直接心に入ってきた言葉に、嘘偽りなど在于る筈もない。

「ごめんね、ユツキ」

結局、そう言いながら優里愛が手綱を動かした方向は、左だった。『よし、もういいぞ。あとは三発ひっぱたいてからひたすら追え』今の所何事もない。心配された内ラチとの激突はない。どうやら信じて正解だったらしい。

『こつから先は奴らも必死だ。何があっても絶対に目を開けるな。あと、例えば俺が何か言ってきたとしても、ここから先で聞く言葉は全部無視だ。いいな？』

「解ったよ、好弘」

残り五百メートル。最内から直線に向けて指示通り、三発ムチを入れて、必死に手綱をしごく。他馬が飛ばし過ぎにより片っ端からバテていることもあり、スタンドからは「ワープした……」とのとの声もちらほらと聞こえてくるほどのスパートを見せている。

白い弾丸が馬群の脳天を撃ち抜いている時、その射手は、親友の声を聞いていた。

『だめ、ユリア！ すぐ右に振って！ 追突しちゃう！』

先程【大外に振れ】と指示してそれを無視された幸子が、なおも優里愛に対し外へ行けと言ってくる。

《無視！》

優里愛はこれを聞き棄てた。もう既にスパートに入っているのである。トップスピードに乗った後の急ハンドルや急ブレーキが、どれほどの危険が伴う行為なのかは、言うまでもない。例えその対象が自動車ではなくサラブレッド（軽車両）でも、その危険性はなんら変わりがないのである。

目を閉じたまま、落馬。只で済む筈も無い。

馬群は2の標識を通過していた。トップで通過したのは、ライトニングボルトだ。さすがはブッチぎり系バカ逃げ馬の現馬神とまで言われている史上最強レベルの逃げ馬だ。粘り込み勝負だと、キツチリ先頭に踊り出してくる。

その四馬身後方にインを強襲する形で馬群の脳天を貫通してきた白い弾丸が迫っている。他の馬は、既にテヅカアクエリアスから五馬身後方にちぎり捨てられていた。

この段階で、優里愛は先程から聞こえている幸子の声は、偽物であると断定していた。外に振れ、内は駄目だという彼女の意見を全く無視して、それが成功しているのである。もはや疑う余地も無い。突然後方から、そんな幸子の悲鳴があがった。

『助けて、ユリア助けてえ！ 取り込まれる、取り込まれる、まだ、死んでないのに！！』

力強く、狂おしく、自分の存在の全てを懸けて優里愛に対し、助けを求める声。その必死さは、とても演技とは思えないほど真に迫っている。

《無視！》

これも聞き棄てる。まだ、ゴールしていないのだ。ここで振り向いてしまうと、去年の幸子の二の舞となってしまう。

『お願い！ 助けて！ 助けてええ！』

相変わらず耳元で叫んでいるかのように響き続ける悲鳴。優里愛

は確信した。

《騙しだ》

と。スパートしている馬の速度である。いつまでも同じ距離感で聞こえてくる訳がない。

残り百メートル。超光速の逃亡者とゴッドオブホワイトウインドならぬ、ワープする白い弾丸との距離は、二馬身差に詰まっていた。距離的に、おそらくは写真判定レベルの際どい勝負となるだろう。

勿論、テヅカアクエリアスが、無事にゴールできればの話なのだが。

ここまで、親友月島幸子の名を騙るレギオンを悉く退けてきた優里愛だったが、ここから先が正念場であると言える。昨年の幸子も、ここまでは持ち堪えていたのだ。

【ぶじゅっ！】

突然、弾力の高い袋が弾け破れたような、気味の悪い音が聞こえると同時に、優里愛は猛烈な腹痛に見舞われた。ことに、美男美女が生まれて来やすい血筋である門倉家の者として恥じない整った唇から、痛みに苦しむ唸り声が漏れはじめる。

どうやら、自分らと同じ痛みを味わわすことによって、強引に落とそうという強行手段に切り替えたらしい。

《痛い、痛い痛い》

あまりの痛みに、頭が回らない。ただ、こんな状態に陥ってもなお、【目を開けてはならない】という意識だけは、はっきりと持つことが出来ていた。

手綱をしごくことも出来ず、まだ差があるというのに、持ったま

まとなっている。しまいには、立ち乗りが基本の競馬において前代未聞の座り乗り状態となってしまった。

この状況で、後ろから声が聞こえてきたのだ。

『大丈夫か、優里愛』

という、好弘の声が。

逃亡者に弾丸が襲い掛かったゴール前。昨年の幸子同様、優里愛はそこかしこの穴から体液を分泌している顔をくしゃくしゃに歪め、後ろに振り向いていた。

優里愛が振り向いた刹那、テヅカアクエリアスの馬体が大きく揺れた。胸が熱い。

『ぐわあああ！』

四角に、悲鳴をあげる好弘の姿が一瞬浮かび上がり、そして、消えた。

一瞬大きく揺れたものの、テヅカアクエリアスは転倒する事なく無事にゴールを通過、優里愛もまた、無傷で一命を取り留めている。胸がまだ熱い。お札と遺骨の入ったお守りに何かあったことは、間違いないようだ。

## 天皇賞

- 一着 五番テツカアクエリアス
- 二着 十七番ライトニングボルト
- 三着 八番ロンバルディア

後日、優里愛は、約束通り、婚約指輪を回収して左手に嵌めたあと、高瀬神宮という神社を訪ねている。自分に取り憑いたレギオンをお祓いをしてもらうためだ。

慶輔の話によると、あのお札は呪いの効力を逆転させるためのお札だったらしく、その効力によって優里愛が死んでレギオンに加わるのではなく、レギオンが優里愛の背後霊として取り憑くという方向に逆転したらしい。

月島幸子は、下半身を失うことになったが、かろうじて一命を取り留めた。本人は至って元気に、

「まあ、生きてりゃそのうちいいことも有るわよ。例えば、優里愛が引き取ってくれるとか、保護してくれるとか、養ってくれるとか」などと楽観的な観測を語っている。

それからというもの、天皇賞から、一番人気の死の呪いは、跡形もなく消え失せたことは、言うまでもない。

終



## 6 五年目、門倉優里愛 四角（後書き）

このような長い話に最後までお付き合いくださいまして、誠に有り難うございますm（――）m

この企画はホラーを百編集めることを目標としております。これからまだまだ作品数が増えてまいりますので、読者の皆様、心行くまでこの企画を御堪能くださいませo（^・^）o

ではでは、失礼いたしますm（――）m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6660e/>

---

奴は四角（よんかど）にいる

2010年10月9日16時00分発行